

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H02309

研究課題名（和文）インクルーシブなプレイス・アタッチメント指標を用いた建築計画学研究

研究課題名（英文）Architectural Planning Research for Inclusive Place Attachment

研究代表者

横山 ゆりか（今井ゆりか）（Yokoyama, Yurika）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20251324

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,400,000円

研究成果の概要（和文）：地域環境に何を新築し何を保存するかは、建築計画にとって重要な決定である。これを住民の愛着の視点から判断できるよう、世界でプレイス・アタッチメント（場所愛着）の研究が行われてきた。しかし、これまで障害者については研究されていなかった。本研究では、視覚障害者を対象に調査し、飲食店や駅など立ち寄り場所にも強い愛着があるなど、既往研究に見られなかった傾向を発見した。また心的疲労から回復できる環境と場所愛着との結びつきが示された。場所愛着の研究を応用するにはより多様な人へのインクルーシブな調査が必要であることと、都市における回復環境の重要性が示された。またインクルーシブな調査で用いる指標を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで不明であった視覚障害者の場所愛着の一端が明らかになり、晴眼者のそれと明確に異なる点があることを示すことができた。これより多様な住民に場所愛着に関する意見を聞くことの必要性がデータから明らかになり、今後インクルーシブな建築計画・都市計画に応用する際に考慮すべき点のいくつかが明確になった。また回復環境と場所愛着の関係について、価値あるデータが得られ、これらデータとその分析により、これからIAPSなど海外の国際的な議論が進むことが期待できる。全体として場所愛着の研究の進展に寄与した。

研究成果の概要（英文）：What to build and what to conserve in neighborhood is one of the key questions in architectural planning. In order to make this decision from the viewpoint of residents' place attachment, the amount of research have been conducted in the world. However, there is no research on place attachment of handicapped residents. In this research, the survey was conducted on visually impaired people and, as the results, unique tendencies that were not observed in previous research with sighted people were discovered, for example, that certain number of people mention cafes, restaurants, and stations as their most attached places. Also, the relationship between the restorative environments and place attachment were found in this research. We are more convinced now that inclusive research on place attachment of diverse categories of people would give us knowledge valuable for future architectural planning and practice. And indices for place attachment are proposed for future research.

研究分野：建築計画学

キーワード：プレイス・アタッチメント（場所愛着） 視覚障害者 回復環境 地域環境 美術館 インクルーシブな建築計画 オンライン会合 外国人居住者

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

人は場所に対しても愛着を持つことが環境心理学分野で指摘されている。現在のプレイス・アタッチメント（場所愛着）研究の第一人者である Lewicka (2018) は、人の移動・移住がこれまでに多く現代世界にあっても、人の場所に対する愛着は依然として見られることを最近の研究で明示しており、現在は都市計画・建築計画の際にそれぞれの場所への愛着を参照することを目指して様々な研究が行われている。しかし、それらの研究は常に障害のない者を対象としており、障害とくに知覚や認知に障害があり異なる仕方で環境を捉える者がどのような場所に愛着を持つのかについては、これまで研究がなかった。またこうした方々を含めて、一般に人々が心的疲労から回復をする場所と、その場所への愛着との関係も未踏の課題であった。場所愛着を都市計画・建築計画の際に参照するためにはさらに、文化を異にして環境のとらえ方が異なる者、あるいは仮想の環境についてなども含めて、場所への愛着をインクルーシブに捉える必要があり、そのためには、現在不足しているデータを獲得し、より包括的に場所愛着の参照可能性を検討する研究が必要であった。

### 2. 研究の目的

本研究ではその端緒としていくつかの課題に取り組む。具体的には、以下を目的とする。

- 1) 知覚に障害のある方、特に視覚障害のある方がどのような場所に愛着を持っているのか、それは障害のない方と異なるのかを明らかにすること。
  - 2) 知覚に障害のある方、ない方が心的疲労からの回復をする場所と愛着との関係について明らかにすること。
  - 3) 文化的要因で環境を異なって捉える人々の場所愛着や仮想環境への愛着についても示唆を得ること。
- また、以上の調査の前に、場所愛着の指標を整理し方法論を検討することを行った。

### 3. 研究の方法

最初に場所愛着の国内外の研究をレビューし、用いられている多様な場所愛着の指標をメタ分析し、本研究のアンケート調査で用いる指標を検討した。検討した指標を用いて3つの目的にそれぞれ沿ったウェブアンケート調査を行った。また視覚障害のある方への調査では特にインタビュー等による事前調査を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) プレイス・アタッチメント（場所愛着）の指標調査結果

Hernández ら (2014) が既に指摘したように、研究で用いられる場所愛着の尺度の構成は、①次元数、②愛着とその他次元との包含関係がしばしば異なっており、未だ定まったモデルがなかった。そこで本研究では、尺度を成す指標の具体形、すなわち質問が全て掲載されている76編の英文文献のレビューを改めて行った。その結果、ほとんどの尺度がかなり多数の質問群で構成されていて調査対象者に多くの負担を要求すること、従って都市計画・建築計画で一般市民の協力を必要とする場面では実用性に課題があることがわかった。その一方で、異なる尺度に共通して用いられている質問があることも明らかになった。そこで研究に用いる質問群を決めるにあたって、尺度の基盤となる多様な心理モデル個々の妥当性については保留し、場所愛着の指標として共通して用いられる質問を整理集約することとした。

異なる尺度（一部の質問が異なるものを含む）を用いた論文56編について集計した結果、attach を直接用いて質問した論文が半数ある一方で favorite など「好き」を意味する言葉を用いたものも1/4程度あることがわかった。次いでその場所が無くなった場合の喪失感や、その場所の特別さ/重要さを聞く質問がどちらも5割弱の論文に見られた。さらに 'part of me' や identify を用いてその場所が自分のアイデンティティにどの程度関わるかを聞くもの、「居続け/住み続けたい」か尋ねる質問の3者それぞれが4割弱で見られた。今後はこれら少数の質問を核とすることで先行研究を生かした小さくて実用的な質問紙が得られると考える。

#### (2) 視覚に障害のある人の場所愛着

少数の協力者を得て2つの予備調査を行った上で、視覚に障害のある方の場所愛着について本調査をした。

##### ①全盲・弱視の方の建築鑑賞の可能性について予備調査

そもそも視覚に障害がある場合、利便性以外の環境の側面に関心を持つ度合いが小さくなる可能性が考えられた。しかし、これを確かめた既往研究は欠落していた。そこで、建築鑑賞を題材に視覚に障害のある方201名に簡単な事前アンケート調査を行った。その結果、視覚に障害がある方も、建物案内ではなく建築を鑑賞しながら巡るツアーをすることに一定程度魅力を感じるということがわかった。また全盲（光覚弁含む）の方の方が弱視の方より魅力を感じる傾向にあった ( $p=.096$ , Mann-Whitney のU検定)。さらに約半数が具体的に鑑賞してみたい建物があると答えた。

次に以上の補足として、東京カテドラル大聖堂において実際に建築鑑賞をしてもらう試行実験を視覚障害のある方5名に対して行い、全盲・弱視のどちらの方からも高評価を得ることができた。視覚に障害がある場合

でも、環境や建築に対して実利以外の面にも十分関心を持っており、建築鑑賞を楽しめることが明確になった。

## ②視覚障害のある方の場所愛着について予備調査

質問紙の調整を行い、予備調査として、全盲および弱視の7名の方にインタビュー形式で身近な学校環境で最も愛着を感じる場所を評価してもらって、本調査の一部の項目が実際に答えやすいかどうかを確認した。

## ③視覚に障害のある人の場所愛着

これまでの場所への愛着の研究は景観保存や景観の計画と関連して晴眼者を対象に行われており、視覚障害者については全く研究されてこなかった。そのため、視覚障害者も晴眼者と同様な場所に愛着を感じると考えて良いかどうかについては、日本をはじめ海外にも知見がなかった。そこで、本研究では、視覚障害者の方104名を対象に、家以外の公共の場所のうち最も愛着のある場所を尋ね、場所の利用頻度、特徴を記述してもらうほかに、その場所への愛着について9項目の質問に答えてもらうWebアンケート調査を行った。

愛着のある場所があるか尋ねたところ、15%の回答者がないと答え、最も愛着のある場所の代わりに最も好きな場所について回答した。両者すなわち、最も愛着のある場所と最も好きな場所について検定した結果、「好きの度合い」「似合っているか」など場所愛着の関連4項目で評価値が有意に異なっていた。愛着のある場所を好きな場所で代替して捉える際には注意が必要であることがわかった。そこで、愛着のある場所があると回答した者のみについて、全盲の方と弱視の方で場所愛着の関連項目の評価値を比較したところ、いずれについても有意な差は見られなかった。視力によって最も愛着のある場所への愛着の度合いは異ならなかった。

最も愛着のある場所として挙げられた場所は、公園が16%、学校が20%、山や川などの自然環境が19%のほか、カフェなどの店舗が20%、駅などの交通施設が13%を占めた。公園、学校、自然環境は晴眼者も共通して最も愛着のある場所としてあげる傾向にあるが、店舗や駅などは晴眼者ではあがりやすく、視覚障害者が都市内で晴眼者と異なる場所に愛着を持つ可能性があることが明確になった。なお、どちらも立ち寄り型の利用をする施設であり、仕事や学校などへの移動の途中で立ち止まる場所という特徴がある。

## (3) 視覚に障害のある人にとっての休息できる場所の意義

本調査では、「見えること」を前提として構築された社会の中で、視覚障害者が外出時に「居心地が良い」と感じる休息場所の条件を明らかにし、またその場所への愛着の程度を調べることで、視覚障害者にとっての外部での休息場所の意義を示すことを試みた。

調査はWebアンケートサービスを利用したアンケート調査と、視覚障害者4名を対象としたヒアリング調査によって構成される。Webアンケート調査では、視覚障害者201名、晴眼者300名より、外出時の休息場所探しの困難度や、普段最も利用する休息場所の選択理由・満足度・好ましい特徴・課題と改善点・愛着度等を聞いた。ヒアリング調査では、外出状況・普段利用する休息場所・居心地が良いと感じる場所などについて聞いた。

結果として、アンケート結果からは、晴眼者より視覚障害者の方が休息場所探しに困難を感じていること、また利用料金より交通利便性の良さを重視していることが示された。また晴眼者に比べ、視覚障害者は休息場所としてより多く飲食店を利用していること、休息場所の選択理由では視覚障害者の方がより「自分の好きなことができる」「その場所や自宅からの経路が安全である」ことなどを重視している。休息場所への愛着度については、晴眼者よりも視覚障害者の方が、「なくなったら悲しい」「大切な場所だ」と感じている。ヒアリング調査からは、飲食店の中でも店舗デザインに共通性があるチェーン店が好まれていること、また視覚障害者として必要以上の対応をされることについての不快感などが示されている。休息場所への愛着については、ヒアリング調査からは普段利用する休息場所が定まっている調査協力者ほど、休息場所に愛着を感じるとの回答が得られている。

まとめとして、多くの視覚障害者は休息場所探しに困難を感じており、休息場所として利用可能な飲食店などを交通利便性の良い場所に配置することが重要であるといえる。このような場所は、視覚障害者にとって愛着を感じる場所となりやすく、結果として外出行動を促進するだけでなく、生活全般の充実度を高めることが期待できる。

## (4) その他の人にとっての場所愛着

### ① 特別支援学級／教室の調査から

小中学校におけるインクルーシブ教育の取り組みの一つに特別支援教室がある。特別支援教室とは、知的発達の遅れはないが心理・行動面での支援を必要とする児童生徒が通級して指導を受ける教室であり、通常学級と特別支援学級の中間的存在といえる。特別支援学級は対象児童生徒がそこに所属するのに対し、特別支援教室は通常学級に所属しながら通う点で異なる。

個人のもつプレイス・アタッチメントにはその場所への帰属の有無も関連する。そこで、ここでは特別支援学級と特別支援教室の環境整備を居場所という観点から比較するために、それらが設置された小学校2校ずつ計4校で空間の使われ方について観察調査・教師へのヒアリングを行った。

特別支援学級、教室ともに、集団での活動や身体を動かす活動のためのスペース、個別指導と座学のためのスペース、カームダウンを行う場所を分けていたが、設置の仕方は異なっていた。特別支援学級ではすべて同

じ教室内に設けていたが、特別支援教室ではメインの教室を座学・個別指導用に設け、集団活動・運動とカムダウンの時には別の場所に移動していた。ヒアリングからは、特別支援学級では児童の「ホームルーム」として一つの空間内で学習・生活全般が行えることを重視していたのに対し、特別支援教室では児童が在籍級に帰る必要があることから、むしろ居場所にはしないことを教師が意識して機能特化型の設えをしていた。このように、教育上の要請から特別支援学級と教室では場所として異なる性格が求められることが明らかとなった。

## ② 外国人による日本の住環境への場所愛着

在留している中国人にウェブアンケートで様々な日本の居住環境（I 民家、II 路地にある家、III 団地、IV その他（a. 仮設住宅、b. 作家物の住宅））の外観・内観写真 11 枚を見せて印象評価をしてもらった。

愛着の指標にもある「好感情」「遺してもらいたい」感情と、「懐かしい」感情との間にはいずれも 0.9 前後の高い相関が見られた。またこれらと「訪れたい」意欲との相関係数は 0.9 を超えた。一方で「住んでみたい」感情とそれらとの相関係数は高くはあったが相対的に下がった。「好感情」についてはいずれの写真も評価の平均がやや+側に位置していたが、民家の外観と現代和風のマンション内観の写真が例外的な高評価を得た。

中国で育った外国人も日本の居住環境に対して若干の愛着を形成することがうかがえた。外国人の場合、愛着と行動意思との関係についてはこれまでよく用いられてきた「住み続けたい」よりも「たびたび訪れたい」がより信頼性の高い指標となるかもしれない。

## (5) オンライン上の「場所」への愛着

今日、インターネット上であっても場所的な性質をもつ場が存在する。2020 年初頭からの新型コロナウイルス流行の影響で外出行動が制限される中で、オンラインでのコミュニケーションや対人関係の重要性が増した。これがインターネット上の場が物理的な場所の代替可能性を示すものかを検討するために以下の調査を行った。コロナ禍の最中の 2021 年 12 月に若年層（19～24 歳）を対象に、インターネット上の場がどの程度、物理的な場所と類似した性格をもつかを調べるオンラインアンケートを実施した。ここでは、使用している SNS に対してどのような感情を持っているかを物理的な場所への愛着を測定する尺度を用いて聞き、「居場所」と感じる物理的な場所に対する愛着と比較した。

その結果、SNS に対しても物理的な場所と同様に居場所と感じたり、帰属を感じたりすることが分かった。対人交流と帰属感に関しては SNS の方が重要性が高く、より快適・安全と感じるのは物理的な居場所であった。コロナ禍以前からインターネットでの交流を対面よりも重視していた回答者は、そうでない場合よりも SNS の重要性を高く評価する傾向があった。また、どちらのグループにおいてもコミュニケーション手段・頻度のコロナ禍による変化と SNS に対する感情の関連は確認できなかった。このことから、コミュニケーションの様態は変化したものの物理的・オンラインの空間に対する場所の感覚には、少なくとも調査時点では変化には至っていないと考えられる。

## (6) 回復環境と場所愛着

### ① 地域環境の特徴と地域への愛着

回復環境についてのこれまでの研究では、回復特性（restorativeness）の高さが環境への好ましさを強めることが示されてきた。環境の好ましさは場所への愛着形成における重要な要素の 1 つであることから、環境の回復特性の高さは場所愛着形成の予測因子として機能しうると考えられるが、地域環境の環境特性の高さと地域への愛着との関連については、これまで十分な研究が行われてこなかった。そこで本研究課題では、近隣地域環境の回復特性を評価する尺度を作成し、地域環境の回復特性がその地域への愛着にどのような影響をもつかについて検討した。

分析の結果、当初の予測通り、地域環境の回復特性と地域への愛着の間には強い正の相関が見られた。また、地域環境の回復特性には、全般的な回復特性の強さ（全般因子）に加え、特殊因子として、地域の街並み、非都会的自然（田畑が多い、など）、都会的自然（公園が多い、など）、地域凝集性（近隣の人間関係など）、気晴らしによる影響のあることが示された。

地域環境の回復特性と、地域における回復感および地域への愛着との関係について検討するために、回復特性の全般因子および各特殊因子の特性値を外生変数とし、これらが地域における回復感を媒介して地域への愛着に影響するという経路を想定したパス解析を行った（図 1）。その結果、地域環境の全般的な回復特性は、回復感を媒介して地域への愛着に影響するだけでなく、地域への愛着に直接的に影響していること、そしてその直接的影響の方が媒介された影響よりも大きいことが示された。

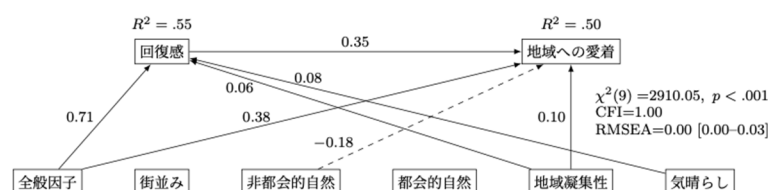


図 1 地域環境の回復特性と回復感、地域への愛着の関係

この結果は、これまで精神的健康促進の面から研究されてきた環境の回復特性が、地域への愛着にとっても重要な要因であることを示すものであり、回復環境および地域への愛着についての研究に、新たな視点を提供するものである。

## ② 美術館にみる回復環境と場所愛着の関係

本調査では、美術館や博物館といった一時的な体験を目的とする展示施設に対して、利用者の回復と愛着、またそれらの関係を全体的に理解するため、アンケートにて回復と愛着の観点で正と負の感情を持つミュージアムを抽出し、それらに対する回復と愛着を調べた。

大学教養学部キャンパスにいた若年層にウェブアンケートで、これまで訪れたミュージアムのなかで、「最も癒される」、「最も疲れる」、「最も好き」、「それほど好きではない」と思うミュージアムを尋ね、ある場合、「施設名」「訪問回数」「主な訪問目的」を確認するとともに、それぞれの施設に対する回復と愛着を1~5の得点で評価してもらった。

121名の有効回答から、「最も癒されるミュージアム」は79名、「最も疲れるミュージアム」は38名、「最も好きなミュージアム」は103名、「それほど好きではないミュージアム」は23名のデータが得られた。平均得点をみると、「最も癒されるミュージアム」と「最も好きなミュージアム」は、回復と愛着とも全項目で4点以上（5点満点）と高く評価されていた。また回復特性の平均得点を、同等尺度を用いた既往研究の得点と比較したところ、「最も癒されるミュージアム」と「最も好きなミュージアム」の得点は、一般に回復特性が高いとされる国立公園や日常的に回復できると思う場所（自宅・公園等）より高い水準であった。一方で、「最も疲れるミュージアム」は、回復に関しては3点~4点、愛着に関しては2点~3点程度であり、「それほど好きではないミュージアム」は、回復、愛着とも2~3点程度であった。両者の回復特性の得点は、既往研究の水族館の得点よりは低かったが、ショッピングセンターや日常的に回復できないと思う場所（人込み、学校）の得点よりは高い水準であった。

また、以上4種類全ての施設に対して、回復特性の4項目全体の平均得点と愛着項目の「好き」、「無くなる」と寂しいとの相関を確認したところ、どちらも強い正の相関が確認された。すなわち、ミュージアム環境における回復体験と、その場所に対する愛着が関係していることが確かめられた。

既往研究では特定のミュージアムについて回復特性が議論されたことがあったが、以上の結果より、様々なミュージアムが人々が心的疲労から回復できる場所となり得ることが明確になった。さらには、ミュージアムでは、心的疲労からの回復場所として高く評価されることが、愛着につながる可能性があることが示された。

## (7) 結語

本研究では以下の成果が得られた。

- 1) 英文による既往論文を見ると、場所愛着の指標に用いられてきた質問に多くの論文で共通するものがあることがわかった。それらを核とした質問紙を用いる方法論を提案した。
- 2) 視覚障害のある方も、その場所で実利を求めめるだけでなく建築を鑑賞するような場所体験を求めており、また実際に鑑賞という場所体験が可能なのことがわかった。
- 3) 視覚障害のある方がこれまで体験してきた場所の中で、カフェや飲食店などの店舗や、駅や駅前広場などを最も愛着がある場所とする例がそれぞれ少なからぬ数を占め、晴眼の場合と異なる傾向がうかがえた。これらは都市内での一時立ち寄り施設という共通点があり、休息場所としても機能することが推察された。一方で休息場所に注目すると、
- 4) 視覚障害のある方は外出時の休息場所の確保に困難を感じており、一般に晴眼者より休息場所への愛着が大きく、より多く飲食店を休息場所に利用していることがわかった。愛着の指標により、視覚障害のある方にとっての特定の飲食店の重要性が浮き彫りになった。さらに、
- 5) 心的疲労からの回復と場所愛着には、地域環境でも美術館のような施設環境でも高い相関が見られ、物理的環境からの直接の影響と並んで環境の回復特性が場所愛着に影響を及ぼしていることがわかった。
- 6) その他、特別支援学級と特別支援教室が場所愛着の観点で異なる環境になっている可能性や日本の住宅に対する外国人在留者の場所愛着の傾向についても示唆が得られ、また、SNSなどオンライン上の「場所」への帰属の様態もうかがえ、さらなる研究の端緒になったと考える。

以上から、これまでの場所愛着の研究では得られなかった複数の重要な事実が明らかになった。同時に、場所愛着研究をよりインクルーシブなものにすることの重要性が明確になった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 根本瑞希・伊藤俊介	4. 巻 47
2. 論文標題 居場所としてのライブハウス-社会的交流と愛着の観点から-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 56-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.24.1_56	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 目黒ひかり・伊藤俊介	4. 巻 47
2. 論文標題 新型コロナウイルス流行の近隣公園の利用・滞留行動への影響に関する調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 58-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.24.1_58	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 李晋琦, 横山ゆりか	4. 巻 45
2. 論文標題 路地と里弄の識別と印象の類似性についての研究 日中両国のアンケート調査を通じて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.23.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 金徳祐, 横山ゆりか	4. 巻 45
2. 論文標題 美術館での座る場所の周辺環境による精神的疲労の回復可能性について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 11-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.23.1_11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤景子	4. 巻 45
2. 論文標題 インクルーシブ教育考 IAPS2020特集によせて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.23.1_25	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金徳祐, 横山ゆりか	4. 巻 46
2. 論文標題 ミュージアムにおける回復と愛着に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.23.2_41	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Dukwo KIM, Yurika YOKOYAMA	4. 巻 26
2. 論文標題 Toward the layout of seating areas for restoration from museum fatigue: based on a behavioral observation survey	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 e-Proceedings of International Association for People-Environment Studies (IAPS2020) 26 Conference	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山ゆりか	4. 巻 43
2. 論文標題 EDRA50国際会議概要	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 70-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 芝田征司	4. 巻 50
2. 論文標題 地域環境の特徴と地域への愛着の関係について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 MERA Journal (人間・環境学会誌)	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20786/mera.25.2_11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤謙太郎, 松田雄二, 横山ゆりか, 矢口莉子	4. 巻 2022
2. 論文標題 視覚障害者の場所の感覚に関する研究 その1: 外出先で選ぶ休息場所の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道): 建築計画	6. 最初と最後の頁 307-308
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢口莉子, 横山ゆりか, 松田雄二, 佐藤謙太郎	4. 巻 2022
2. 論文標題 視覚障害者の場所の感覚に関する研究 その2: 建物鑑賞の実践に向けて予備調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道): 建築計画	6. 最初と最後の頁 309-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計14件(うち招待講演 0件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Dukwoo KIM, Yurika YOKOYAMA
2. 発表標題 The Study of Restorativeness and Place Attachment in Museums
3. 学会等名 IAPS 2022: 27th Conference of the International Association for People-Environment Studies, Lisbon, Portugal. -Virtual (国際学会)
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 Jinqi LEE, Yurika YOKOYAMA
2. 発表標題 Meaning and Value of Japanese Living-Environment for Foreign Residents in Japan
3. 学会等名 IAPS 2022: 27th Conference of the International Association for People-Environment Studies, Lisbon, Portugal. -Virtual (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐藤謙太郎, 松田雄二, 横山ゆりか, 矢口莉子
2. 発表標題 視覚障害者の場所の感覚に関する研究 その1: 外出先で選ぶ休息場所の特徴
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢口莉子, 横山ゆりか, 松田雄二, 佐藤謙太郎
2. 発表標題 視覚障害者の場所の感覚に関する研究 その2: 建物鑑賞の実践に向けて予備調査
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 李 晋琦, 横山ゆりか
2. 発表標題 日本の居住環境に対する外国人の場所愛着に関する研究 -在日中国人向けのアンケート調査を通して
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2022年

1 . 発表者名 Seiji Shibata
2 . 発表標題 What aspects do people find restorative in their neighborhood?
3 . 学会等名 IAPS 2020: 26th Conference of the International Association for People-Environment Studies, Quebec City, Canada. -Virtual ( 国際学会 )
4 . 発表年 2020年

1 . 発表者名 Shunsuke Itoh, Sota Suzuki
2 . 発表標題 An Intervention Study to Assist Wayfinding of a Student with Intellectual Disabilities in a Special Needs School
3 . 学会等名 IAPS 2020: 26th Conference of the International Association for People-Environment Studies, Quebec City, Canada. -Virtual ( 国際学会 )
4 . 発表年 2020年

1 . 発表者名 Jinqi Li, Yurika Yokoyama
2 . 発表標題 Conservation Consideration on Old Asian Alleyways in Japanese and Chinese Residents and Its Relationships to Environmental Appraisals: A questionnaire survey on photographs of 'Roji' and 'Lilong'
3 . 学会等名 IAPS 2020: 26th Conference of the International Association for People-Environment Studies, Quebec City, Canada. -Virtual ( 国際学会 )
4 . 発表年 2020年

1 . 発表者名 Yuki Yokota, Mizuho Ara, Yurika Yokoyama
2 . 発表標題 Image-Mediated Place Attachment and Migration: The case of Japanese Anime pilgrimage tourists to Numazu, the city illustrated in 'Lovelive! Sunshine!!'
3 . 学会等名 IAPS 2020: 26th Conference of the International Association for People-Environment Studies, Quebec City, Canada. -Virtual ( 国際学会 )
4 . 発表年 2020年

1. 発表者名 山田真弓, 伊藤俊介
2. 発表標題 公共空間におけるカムダウンスペース利用と認知の現状 - 当事者対象のアンケート調査結果
3. 学会等名 MERA (人間・環境学会) 大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横山ゆりか, 伊藤俊介, 芝田征司, 松田雄二
2. 発表標題 場所への愛着の指標について
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 芝田征司
2. 発表標題 地域の環境特性と回復感, 地域への愛着の関係について
3. 学会等名 MERA (人間・環境学会) 大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Seiji Shibata
2. 発表標題 Relationship Among Community Environmental Characteristics, Community Attachment and Restorative Experiences.
3. 学会等名 IAPS2022: 27th International Association for Person-Environment Studies (IAPS) Conference, Lisbon, Portugal (online) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shunsuke Itoh
2. 発表標題 Meaning of Physical Places and Virtual Spaces
3. 学会等名 ICEP (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 俊介  (Itoh Shunsuke)  (50339082)	東京電機大学・システムデザイン工学部・教授   (32657)	
研究分担者	芝田 征司  (Shibata Seiji)  (70337624)	相模女子大学・人間社会学部・教授   (32707)	
研究分担者	松田 雄二  (Matsuda Yuji)  (70516210)	東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・准教授   (12601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金 徳祐  (Kim Dukwoo)	東京大学・総合文化研究科・特任研究員   (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	李 晋琦  (Li Jinqi)	東京大学・総合文化研究科・特任研究員  (12601)	
研究協力者	岡部 真子  (Okabe Mako)	東京大学・工学系研究科・修士課程学生  (12601)	
研究協力者	矢口 莉子  (Yaguchi Riko)	東京大学・工学系研究科・修士課程学生  (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関